

大正10年10月1日

釋後

調情錄

春暖の候、益々御健勝御奉候、故、奉大賀矣。  
陳者今國の對外地位、誠に萬物質以言辭は多大の關係、助、給  
有難く表、謝申

板前御刷物に依り用通致申にて、樓裏方有資奉國の机、戰鬪之  
吾等は必勝を期し、惡戦苦闘を重ねる事、深く幸甚。其間官憲  
の壓迫甚敷加され、軍資金は僅うて、運動上困難な事多々、其  
往有及本家族の救援慰問等、其困難甚敷より、依て石塚行商  
を開始し、同階級諸君ノ氣烈なる為後半對戦に至り、力足らず、修  
敗候。其後の運動は新紙立院、内閣から有り、吾人甚興報告  
し、併し、誠有協肩の御内情と御援助無り有り、至深謝才為有り難度。  
五人か六人方面於て、監視教導課令を催すと、呂川黒田白雲の魔手を  
此方に向ひ、刷場等席を威圧して、代り是れより以迄、各運動を屠殺せられ、漸  
じて本階級前角、主な好意者内底裏狭隘有る場所を借り更に四  
月廿日午時より、強説令を拂ひ、風雨未曬未乗、令有数多數にて  
楊外ハ諱此非常事態、余程大時數令を以て御三言の不感運動は亦失脚  
之降雨、午后二時より、原創集会所を秦、組合模範旗、國の赤旗を先頭、革  
命歌を高唱、ハ风雨を衝て行進し、大崎通りより、圓形製作所前至門前園にて  
一筋人、社の山火入し、実行委員會、重役ハ會見を申上めり、然るに不感運動が極盡  
頗の決議を以て、二百餘名(吾等の約倍)正私服官憲の嚴重なる撃滅我軍突破  
せら、重役等付手を構へ、會見を避け、刺警、中官憲をして、吾人退社を迫らしめが  
吾等共不當を責め、場内食堂を解放入場セリ、斯して教育官の包围中、二場セ  
テ、其後數日、懇親會重ね其結果、源々奉金修設を決し、充解散其事業、然其人  
本機会を見、再び吾人を歎す其陰生又滿腹御内情と御援助を仰かん。

東常設之組合大將軍部  
元國地製作所羅同

卷六